
ガラスの十代

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラスの十代

【Nコード】

N0686Q

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

どうしても演奏が上手いかず悩んでいる僕のところには彼女が来て言う。けれど僕は素直になれないで。光GENJIの名曲からヒントを得た曲です。とにかくいい曲でした。

第一章

ガラスの十代

僕はその時。本当に荒れていた。

何でもない理由だった。上手くいかなかった。

「何でだよ」

部室でだ。楽器を手にして苦い顔になっていた。

僕は吹奏楽部で。いつもサククスを吹いていた。僕のいた学校ではサククスもある吹奏楽部だった。それでサククスを担当していたけれどだ。この時は。

どれだけ吹いてもその曲をマスターできなかった。嫌になる位だ。先生も周りもいけると言ってくれる。それでもだった。

自分では満足できなかった。とてもだ。

それで部活が終わっても部活がない時でも練習していた。それでもだった。

「駄目だ……」

あまりにも納得できなくてだ。それで苦い顔で言った。

日曜の練習が終わっても自分で練習をして。やっぱり駄目だった。それで部室でサククスを前に頂垂れている僕にだ。彼女が言った。きた。

付き合っているといえれば付き合っている相手だ。その娘が来てだ。

僕に言ってきたのだ。

「駄目？ やっぱり」

「駄目だね」

僕は頂垂れながら彼女に返した。

「もう全然ね」

「そうなの」

「どうしたらいいんだよ」

僕は学校の木とパイプの椅子に座って頂垂れたまま言った。

「どれだけやっても駄目だなんて」

「それじゃあ」

「それじゃあつて?」

「ありきたりな言葉だけれど」

彼女も暗い顔になってだ。僕に言ってきた。

「ここはね」

「どうすればいいっていうんだい?」

「練習したら?」

これが彼女の言葉だった。

「もっとね」

「練習しろつて?」

「やっぱりそれしかないんじゃないかしら」

「こう言うのだった。」

「できないのならね」

「練習ならしてるよ」

僕は眉を顰めさせて彼女に言い返した。

「もう飽きる位ね」

「それでもよ」

「もっと練習しろつて?それでも」

「だから。できないと思つたら」

「だからしてるよ」

僕はたまりかねた口調で言い返した。

「もうさ。嫌になる位」

「それでもよ」

けれど彼女の言葉は変わらなかった。

「駄目だつて思つたら。それ以上に」

「練習しろつて?」

「うん、部長も言つてたじゃない」

今度はこう言ってきた。確かに部長は僕達にこう言った。できないのならばできるまで練習しろ、それこそができるようになる早道だ

って。

だから僕も今練習をしている。けれどそれでもだった。全然できない。全くだった。

それでうんざりとしていたところにそんなことを言われてだ。正直頭にきた。

それでだ。僕は席を立って彼女に言った。

「そんなこと聞きたくないよ」

「けれど」

「けれどもどうしてもないよ。だから練習はしてるよ」

「本当に？」

「そうだよ、してるよ」

また言う僕だった。

「それこそ。嫌になる位にね」

「あまりそうは思えないけれど」

僕が怒って言うようになった。彼女はこう言い返してきた。

「今。何か」

「何かって？」

「悩んでるばかりで」

「こう僕に言うのだった。言葉を出すのを躊躇っているけれどそれでもあえて言うような。そんな口調で僕に言ってきたのだった。」

第二章

「それじゃあ」

「実際には吹いてないっていうのかい？」

「そうじゃなかったらいいけれど」

「だから練習してるよ」

うんざりとした口調になっているのが自分でもわかった。

「本当にね」

「じゃあ今は？」

「今はって？」

「今は練習する？できる？」

僕に今問うのはこのことだった。

「今は。できるの」

「今は」

僕は彼女のその顔を見てだ。眉を顰めさせて返した。

「止めておくよ」

「どうしてなの？それは」

「気分じゃないから」

本当にだった。何かやる気がなくなっていた。言われてみれば最近こうしてやる気がなくなってはまたやる、その繰り返しだった。

「だからね」

「それじゃあ駄目だから」

「駄目って」

「練習しよう」

言う言葉は同じだった。見事なまでに変わらない。

「また」

「だからいって」

「練習しないと」

僕の目を見てだ。咎めるようにして言ってきた。

「駄目よ。だからね」

「だから今はいいって」

「それでも。本当にできるようにになりたいのなら」

「今はいいって言ってるじゃないか」

自分でも言葉が荒くなってきたのがわかった。けれどそれもだつた。その言葉を変えることができなくなってきていた。

心が荒れてた。僕は遂にこう言った。

「もういい、いいんだよ」

「いいって」

「今日はもうこれで帰るから」

部室に残っているのは僕達二人だけだつた。それではだつた。

僕達はそのまま部屋を後にした。サックスを置いたまま。深く考えていなかった。今はただ何もかもが嫌になつて。そうしただけだつた。

部室を出てから下駄箱に向かおうとした。帰るつもりだつた。

けれどここだ。その下駄箱でだ。

彼女が来た。後ろから必死に駆けてきてだつた。僕に言ってきた。

「練習しよう」

「まだいうんだ」

「ええ」

咎める顔でだ。僕に言ってきた。

「演奏できるようにになりたいのよね」

「うん」

それは本音だつた。嘘じゃなかった。

「それはね」

「それじゃあやっぱり」

「練習しかないっていうんだね」

「そう。結局のところはね」

「何でも努力しないとね」

「できないわ」

これもいつも言われることだった。この吹奏楽部ではだ。

その言葉を受けてだった。僕は。

「それじゃあさ」

「どうするの？やっぱり帰るの？」

「いや、気が変わったよ」

こう彼女に返した。

「ここはね」

「ここは？」

「部屋に戻るよ」

意を決した顔でだ。僕は答えた。

第三章

「それじゃあね」

「ええ、それじゃあね」

「行くよ、今から」

僕は一人で行くつもりだった。練習するならだった。

けれどここでだ。彼女も意を決した顔になって僕に言ってきた。

「待って」

「待ってって？」

「私も行くから」

こう僕に言ってきたのだった。

「それで演奏聴かせて」

「僕の演奏をだね」

「ええ。それでアドバイスしたいから」

それでだというのだった。彼女は。

「そうしたらいい部分とか悪い部分とかわかるじゃない」

「確かにね。その通りだね」

「だからね」

それでだというのだった。彼女は。

「一緒にね。いさせて」

「うん、わかったよ」

僕は彼女のその言葉に頷いた。

「それじゃあ。一緒にね」

「ええ、部室にね」

「サックスは」

「そのままよ」

僕が置いていったそのままにしているという。

「だから」

「部室に行けば」

「何時でも演奏できるわ」

笑顔で僕に言ってきた。

「それじゃあね」

「うん、それじゃあ」

こうしてだった。僕達は部室に向かった。

それで一旦演奏してみる。彼女はじつと聴いていた。

聴き終わるとだった。彼女はすぐに僕にアドバイスをしてくれた。

「そうね。大体いいけれど」

「いいんだ」

「ただ。悪いところがあるから」

「そこは何処かな」

「そこはね」

細かく指摘してくれた。それをなおすとだった。

まるで違っていた。あらためて演奏してみると。

それに驚いているとだ。彼女は満面の笑顔で僕に言ってくれた。

「よくなったわね」

「うん、さっきまでとは全然違うよ」

「そうよね。このままいけば」

「演奏できるようになるね」

万全の演奏がだ。それがだった。

「やっと。君のお陰で」

「私のお陰って」

「だって。君が聴いてアドバイスをしてくれたから」

本当にその通りだった。彼女のお陰でだった。

それで今こうして演奏できた。そのことに心から感謝して告げた。

けれどだ。彼女はこう僕に言うのだった。

「うっん、違うわ」

「違うって？」

「だって頑張ったから」

僕がだというのだった。

「それでできたのよ」

「いや、違うよ。君が聴いてくれたから」

「そうだっていうの？」

「そうだよ。それでだよ」

お互いに一歩も引かない状況になっていた。けれど。

僕も彼女も同時に思いなおしてだ。こう言い合った。

「いや、そうだね」

「そうよね」

笑顔で言い合う僕達だった。

「お互いにね」

「頑張ったからね」

それだった。僕達はだった。

お互いに笑顔でサックスをなおして部室を出て戸締りをしてそれで学校を出て。そうしてだった。

「帰ろうか」

「ええ、二人でね」

笑顔で言い合っただけのまま二人で下校のデートに入った。今では懐かしい学園生活の頃だ。十代の記憶は今も色褪せていない。

ガラスの十代 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0686q/>

ガラスの十代

2011年1月9日23時55分発行